

八点

③ 汐干狩縄文人の裔の背ナ

増田 守

日本列島は造山活動による偶然の産物である。そこに地続きの大陸から、祖先がやって来た。或いは海流に乗り漂着した。潮干狩に興じている目の前の人は縄文人の末裔であろうか。それとも、別の渡来人の末裔なのだろうか。偶然出来た陸地と、それに偶然渡来した人間。ロマンの海はますます深くなる。

① さくらさくら覗いてみたき嬰の夢

恩田 才美

日本人は誰でも桜に寄せる想いは終生持ち続けているでしょう。人生感、宇宙感も引き出して語られているから。赤子は生まれてすぐ聴覚が働き出すらしいが、確と意識しないまでも他の感覚も目覚めているに違いない。夢も又しかり。赤子のみに許される天使の微笑みの本当の姿は何。不可侵の世界だから私は覗いてみたいのです。これから数多のさくらに出会うには違いない嬰の出発点に咲いている桜と何かを。

六点

① 蕎麦すする一人の音や荷風の忌

中村 朋子

吟行句会で、ときおり浅草へ行きます。行けば、必ず、尾張屋というお蕎麦屋さんへ。晩年の永井荷風が毎日のように通った店だそうです。さすがに美しい。なので、何度も句にしようと思いました。お花見帰り、鬼灯市帰り、羽子板市帰り、初詣帰り……しかし、さっぱりできない……いいかげんあきらめていたこの春、ふたたび吟行がありました。お昼はここで申し合わせていた皆とはぐれ、ひとりで店へ。今日はひとりだな(いつもだいたいひとりなのですが)、そう思ったとき、ふっと浮かんだ句です。荷風忌は四月三十日。その翌日のことでした。

五点

② 皿にふきのたう 剣山にふきのたう

中村 朋子

横浜と大船の中ほどにある上郷の森をご存じでしょうか。小学生もよく訪れる自然観察の森。食堂には、採れたての蒨の薑や筍も登場します。「皿にふきのたう」はそこを訪れた折のもの。長靴姿の板さんたちが採ってきたばかりの早春の味です。天ぷらでいただきました。「剣山にふきのたう」は、実は別の場所で見ました。二俣川駅構内の活花展示コーナーです。上郷の森で蒨の薑をいただいた少しあと、この活花に、蒨の薑が添えられていました。花材としての蒨の薑を見たのは初めてです。小さな剣山に活けられた数本の蒨の薑が、ささやかに、誇らしく、春の訪れを告げていました。

① 静寂を切りて大輪椿落つ

桜井 幸枝

紅椿の大輪が土の上にくっつか落ちていく。ガラス戸の中から、いつ落ちるかと同じと見続け。しかし、見ている時は待てど落ちて来ない。物体の早い動きが気を切る。真赤な椿故、私の妄想的想念であつたのだろう。

① 高速船地球つんざき春を行く

荒木ツル子

早春の河津桜と大島椿まつりの旅に参加した折の句です。満開の河津桜に堪能し、翌日、稲取港より大島港へと向かう船上からの一句です。まるで海を真ふたつに分けるかのごとに進む様子を心地よさと春を感じました。

いさかいは塩分の量四月馬鹿

岩野ヤエ子

塩分は、血圧を上げるので、「食事の塩分は減らしましょう」という保健所、医者等の指導が特に、高齢者に厳しい。そこで、私も、食事を作る際には、なるべく塩分は、控え目にと気を付けているが、夫は、漬物に醤油、塩焼きの魚に醤油、「味噌汁の味が薄い、この料理の味はもっと濃く」と不満を言う。そこで、私の一言が出る。「四月馬鹿」の季語の意図するところとは違うが、夫婦の状況と語感が合うような気がしてこの季語を使ってみた。

透す陽の濃淡のあり春障子

柏尾のり子

実家の和室の障子の破れを切り貼りました。閉めた時、新しい紙のところと古いままの紙のところ、差し込む光の明るさが違っていました。障子のないマンション暮らしなので、久しぶりに障子を通したやわらかい光を感じることができ、しみじみとした気持ちになりました。

四点

① 鎌倉や日和尽くして花御堂

恩田 才美

四月八日、晴。灌仏会。鎌倉の長谷大仏、光則寺、長谷観音と花御堂を廻った。花御堂の飾られ方は、豪華ながら何故か余所余所しく感じられたり、草の花も盛り込んで人の手の動きまで伝わるようなものまで各寺一様ではない。香水や甘茶への長い列。童形裸身の釈迦像は終日さらさらと輝いていた。長谷観音本堂前で琴と尺八の演奏が催された。賑わいの中にあるのびやかな鎌倉仏生会、花祭。異国女性の軽やかな話し声もさわやかに心に残る一日であつた。

① 熊谷草ふくらむ母衣の雨はじく

藤崎安紀子

熊谷草は花の形を熊谷直実の背負う母衣に見立てて名付けられたそうですが、一度も目にした事はありませんでした。でもその熊谷草をはじめてみつけ、そのかわいい花にみとれてしまいました。折りしもザーと雨が降り出し、まるで母衣が矢を防ぐように雨をはじく様子がとて

も印象的でした。

春疾風ビル解体の工事幕

増田 守

昼休みに外に出たとき、ビルの解体工事の防護幕が春疾風に煽られていた。スクラップ・アンド・ビルドが相継ぐこの街は、急激に変貌していく。日本のあちらこちらで、街の同質化が進んで行くように見える。

梁太き名主の土間や花菖蒲

稲葉 幸

東海一の菖蒲園を持つ庄屋の加茂壮。桃山時代から続く庄屋で、長屋門は二百七十年前のものだそうです。千五百種の花菖蒲が楽しめます。広い土間で食べる庄屋料理が珍しい物でした。

① 染飯（そめい） くちなしの実で炊いたモチ米飯 ② 最福寺納豆 モロミに柚子、茄子、生姜を味噌に漬けたもの ③ 味噌玉子 ④ 味噌汁 山野で採れた食材 ⑤ デザート 山桃料理は必要ないと思いましたが、因みに書きました。